これからの学校・家庭・地域の連携のあり方に関する研究

仲川　佳奈（生涯スポーツ学科　学校スポーツコース）
指導教員　　柴田　俊和

キーワード：三者連携　開かれた学校づくり　支援と協力

１．緒言

近年、子ども達を取り巻く環境が多様化・複雑化し、社会性や模範意識の低下、学力や学習意欲をめぐる問題、いじめや不登校の問題など、様々な問題が増えてきている。こうした課題を解決していくため、学校・家庭・地域の「連携の必要性」が唱えられ、学校支援ボランティアの受け入れなど、家庭・地域の教育力を活用した取り組みを具体的に進めていくことが求められている。

また、中央教育審議会の答申（1996）においても、「第４章学校・家庭・地域の連携：子ども達の教育は、単に学校だけでなく、学校・家庭・地域社会が、それぞれ適切な役割分担を果たしつつ、相互に連携して行われることが重要である。」と記されている。

本研究では各地域ではどのように学校・家庭・地域が連携し、どのような取り組みを行っているのか、その取り組みは学校・家庭・地域、そして子どもにどのような影響を与えているのかを明確にする。また、これから子どもたちを取り巻く環境に新たに必要となってくることは何なのかを導き出す。

２．研究方法

本研究の調査対象は、奈良県の小学校３校と滋賀県の小学校３校の学校長（管理職の先生）で、ヒアリング調査法を用いて研究を進める。

３．結果と考察

調査結果から、「連携」と「支援」の違いがあることに着目した。実際に調査した内容をまとめたが、三者が連携した取り組みだと言える活動は、現実にはほとんどない。また、三者連携の重要な手掛かりになってくると考えていた「開かれた学校づくり」では、情報の提供や収集の重要性は連携の鍵となるが、事前に予想していたほど、重要なものではなかった。しかし、どの活動も、全く関係ないと言えるものは何一つなかった。三者連携のきっかけとなる要素はたくさんあることに気付き、それらを活かし、行動に変えていくことが大切であることが明らかになった。

４．結論

現在の「支援」と言える状態から、「三者連携」の姿に変えていくことが、これから重要となってくると考える。どちらかが片方に頼ってしまうのではなく、子どもを取り巻くすべての者が声を挙げ、互いに共通の目的を持って協力し合うことが「連携」の姿に近づく要因になるだろう。互いに無理な要求をするわけでもなく、控え合うことでもない。

三者が子どもや地域に関する情報を常に共有することを目指し、互いに興味関心を持ちあい、そのうえで子どもにたっぷりの愛情を注ぐことができる環境づくりを学校・家庭・地域が共に意識して進めていくことが重要であると言える。子どもを持つ保護者や学校に隣接している地域住民、学校関係者だけでなく、社会全体で子どもの成長に対して真剣に向き合っていく姿勢が重要だ。

引用・参考文献

文部科学省（1996）「21 世紀を展望した我が国の教育の在り方について」中央教育審議会答申
教育基本法（2006）第Ⅰ章第３条生涯学習の理念
文部科学省（2003）文部科学白書